

M36a 太陽黒点が発生する根本要因の推察

藤原ケイ

筆者は 2017 年秋の本大会で「黒点変動と太陽系天体位置との興味ある関係」のタイトルで講演している。ここで示したのは ”木星と 133P (周期彗星) が外合位置のとき 黒点相対数は極大になり、内合のときは極小になる”、という俄かには信じがたいものであった。単なる偶然としか理解が出来ないかもしれない状況の中で、現在まで様々な角度から検討・考察を続けてきた。

- < 2018 春 133P の地球への影響。 >
- < 2019 春 近点移動の別解。太陽系は”法則”で支配されているのではないかも知れない! >
- < 2020 春 光子の減衰 (徐々に短くなること) が赤方偏移。 >
- < 2020 秋 光子の構造 = プラス / マイナス始粒の交互配列二重鎖構造の自力運動体。 >
- < 2021 春 光子の反射、屈折挙動などの基本的な挙動の考察 >
- < 2022 春 宇宙は膨張していない。新たな宇宙観。 >
- < 2023 春 光子の観測性の考察から ”波動 / 粒子の二重性” は勘違いである。 >

今回の要旨は、黒点発生は太陽系の全ての天体の共同作用による太陽外部起因であり、天体間の ”光子加速” と ”H₂O 分布状況” で理解できる、である。短周期 (約 11 年) に加えて、ピークのズレ、長期の無発生期間などにも言及する。

*従来の物理理論からのものとは異なる太陽系像による理解である。